いにしへの聖の遺蹟を止めけむみ山に白く雲
收れる

法華寺の丹ぬりゆゆしき廣庭に牡丹傾き散り
にけるかも

み山べは雨もよひせり立ち歸る母の俥に幌を
垂れたり

折にふれたる

ひそやかに吾がさ庭べに來て居りし小猫はあ
はれ青草を食む

みまかりし友を葬る三首

俄雨雄物川原を降り過ぎぬ囀り止まぬよしきりの聲

灰かきて友のお骨をひろひつつ思ひしぬばむよすがさへなし

水かさのみなぎり増せる雄物川さみだれぐもりおほに湛へつ

妻を喪ひたる友の新盆に

みそ萩を野べに折りつつる友にあひ立ち別るるを寂しく思へり

旅折をり

みちのく

驛路はなほ戸を閉して朝早し木の葉散りぼふ
あらしの名殘り

みちのべの草濡れふしてみだれたり嵐のあと
を旅遠く來し

川上溫泉

まなかひに霧立ち動く冷めたさよ谷川とほく
のぼり來りし

182

ゆづかれの今宵を早く臥せりけり山下川にたぎつ瀬の音

吹き流るるさ霧つめたく肌に觸り痛所の藥貼りかへにけり

ふかぶかとさ霧立ち立つ間より朝かげ染むる吾妻の山肌

183

目の前にゆゆしく流る大き霧の朝かげ明かく晴れむとすらし

山裾原芒の穂なみ白々し風まさやかに吹きあぐるなり

刈草をつけて過ぎゆく親馬におくれがちにつきゆく仔馬

檜原湖

この湖の生りし底びに家も木も常久に水漬く
と聞けば悲しも

喉青き鵜の鳥一羽飛びゆけりまひる明るき湖
の上低く

湖の面にさざ浪よせて風立ちぬすでにもみづ
る諸樹のさやぎ

湖のべの白枯木立へあらはなり家居疎らに建ち
ならぶ見ゆ

京都御所

大正十三年十月十九日中村憲吉君と京都御所を拜觀す。

渡殿はほのかにくらしいにしへゆ墨繪ゆかしき荒駒の障子

殿上の櫛形窓に人影のありし昔をしのびつるかも

み帳臺の帳垂れたるみ前にし胸高に踞る木彫の狛犬

鳴板を音たててのぼる大臣たち知ろしめしけむ晝御座にし

大御代の遠のむかしゆ神さびてみ帳臺ふかく
帳垂れたり

ほのぐらくうつろがままに大宮の夜御殿の妻
戸開きたり

大宮の夜御殿はかしこけれ大き妻戸は二折り
に開き

植竹に朝の群鳥囀るに御睡足らひめざめまし
けむ

ながらふる時雨の雨に大宮の石灰壇は蔀下ろ
せり

白砂の萩壺の萩刈られたりしぐれの雨はふり
そそぎつつ

紫宸殿の大庭めぐらす廻廊の七つの御門常に
開かず

長月のしぐれはふれり玉敷の御庭に青き右近
のたちばな

南殿のみ階の櫻落葉せりしぐれに濡れて殘る
乏しさ

明治天皇群臣を小御所に召して王政維新
の廟議を決し給へり。

はりみてる赤心くだき大前に臣ら奏すを嘉み
し給ひけむ

大宮の御所の間毎の奥ふかみ世のものの音き
こえ來ぬかも

み園生のふかき木立のあひ間より大文字山の
見ゆるゆかしさ

簷高き大樋を落つる雨水のとよもし忙はしま
ひるまにして

十一月二十九日

冬の日は赤くしづめり古寳らは明日の除隊を
まちきれずあらむ

除隊日の曉まちがてに兵士らよあまりうれし
くて眠られぬらむ

憶山本信一君

春をだに待ちあへざらむさびしさをみ母に告
げて熱いでにけむ

すべもなく藥ふふみけむ老母のあつきみとり
に涙こらへて

目に立ちて衰へしるき友をまもりかなしさに
堪へてものをいひつる

人の世にいのち短かく逝きし君かなしき歌を
のこし給ひし

墓標かきてさぶしもみ名をとどむ文字の描き
をゆるし給はね

雜司ヶ谷にて

青龍寺

明治四十年のころ富士山の麓青龍寺に新年を迎へたりき。

ふり來つるならはしきびしこの朝は默しをふ
かく寺人(てらびと)のをり

雪山をただに落ち來る溝川に默しをまもりう
がひせりけり

曉の星冴ゆる藪に眞清水をくみてすがしも年
立つ朝に

藪かげに若水汲めり水さしに溢るるばかりそ
の眞清水を

ひたすらに底冷えとほる曉の伽藍にこもる大
き靜かさ

時を告ぐる鐘撞きにけり目の下の裾野にひろ
ごる夕さる光り

禪寺の朝な夕なの起きふしもつつしみふかく
心にしみぬ

富津にて

砂掻きて砂のぬくもりなつかしむ小松が下に
松露ほりつつ

下枝張る小松がもとの日だまりにつぶらつぶ
らに松露おもしろ

掌(たなぞこ)に松露を見つつをかしきはひげにも似たる
細根あること

盆の上にとりし松露の太きもの小さなるもの
をかぞへつるかも

みちのくのみ冬をこもらす母上に松露おくら
む少なけれども

松かさや松葉かきそへ籠のまま送りまつらむ
これの松露を

包み解き松露にこぼるる砂子にも暖かき國を
偲び給はむ

神棚にそなへますらむ白紙を二た折りにしき
松露砂ながら

母上の健やけき便りいただけり雪見ぬ國も寒きこのごろ

さ夜ふけて遠き濱べにたえまなし寄する浪音退(しりぞ)くなみ音

朝なあさな來啼く野鳥の幽けさよ霜げにしろき枯葦が中に

藪ふかくねぐらの小鳥ひそかなれをりをり枝をはなるる羽音(おと)

とりどりに雪をよろこぶ子らの文稚(をさな)き文字(もじ)の心のままに

雪の上に月は照るらしこの宵は外(と)の面(も)にあつまる童(わらべ)らの聲

迎齋藤茂吉君

腰おろし吾がひたごころ親しかも君すこやか
に歸り來(きた)れり

この道にひたすらにして年月をへにけむ君が
服(ふく)のほころび

清澄山

くろもじをわれ手折りつつ居りにけり新枝(にひえ)の
みどりにほひかなしく

足の許にくづれこぼるる山土のおのづからに
し止(しと)まる閑かさ

雪解の赤土道を下りけり谷間ふかく山のあか
るさ

樋にひきし水車の水ははづしあり藪下川に落
ちそそぐ音

汗ばみてしばし憩へりきさらぎの埴土山に朽
葉乾ける

埴土に淺き根を張る小柴原芽立はしるし春近
みかも

谷にのぞみかまへし茶屋は戸を閉せりみ冬を
里に人下りけむ

見おろす谷まはふかし鳥ひとつ大木より直に
飛びくだりたり

雪とけて岩面したたり落つる水つぶさにぬる
る豆蔦あはれ

雪とけてはひもとほれる豆蔦のさび色にぬれ
て古葉たもてり

久に思ひて今日のぼり來し山の上の平に殘る
雪ふみにつつ

大川

兩國橋を渡りて來れば川下に曇り吹き晴らす
風早みかも

くもりながらあかるく思ほゆ大川にさか浪立
つるみむなみの風

南の風吹くはやし大川のにごりをあぐるひろき川面

帆を張りて大川口をのぼる船のふなべり越えて浪の立つ見ゆ

大川に潮あげ來らし川べりの石垣にゆたに浪立ちよする

滿洲行（一）

弔黑溝臺戰蹟

夜あけたる曠野にわれの車はやし二頭を並めて白き馬馳す

雨はれし曠野のなかの轍あとはてしも知らに
うちみだれたり

高粱はいまだものびず限りなき畑の畝なみ馬
車を馳せしむ

ゆきなづむ馬の手綱をかいくりて馭丁したた
か鞭くれにけり

日高くはろけくも來し車とめて汗ばむ馬に水
かひにけり

曠原に濁りうねれる太子河はいづらに流れゆ
くにやあらむ

畑原に黒溝臺はま近なり木むら平らかに家の
屋根見ゆ

山だにも見えぬこの原とよもせし戰の蹟に我
は來にけり

望遠鏡に思ひつつ見る一ところただ青々し畑
のうねなみ

夜をつぎて戰ひ止まぬこの原にみちのくの兵
士多くはてける

この原に屍重なりはてにける我がみちのくの
兵をかなしむ

土凍てて見とほす原のま面に戰ひはてしかあ
はれ吾が兄は

玉の緒の絶えなむとせしきはみまで銃を握り
てありけむわが兄

わが兄の斃れし原に日は暮れてきびしき凍り
いたりけむかも

捨て去りし屍を集め葬りたる露國軍人の墓じ
るしあはれ

倒れたる石起し讀めり我が邦の文字彫りし露
國軍人の墓

ま近くも啼くよしきりか吾が立てる河べに青
く草は茂れる

心空しく佇(たたず)み居たり六月(ろくぐわつ)の照る日の暑き石碑
のもとに

野のうへの墓に手向けむ花もなし水筒の水そ
そぎつるかも

ふりごとを偲ぶも空し一人子の遺子(わすれこ)さへも世
になきものを

旅人(たびと)のわれにさぶしもおのづから柳の絮(わた)は空
に飛びつつ

滿洲行（二）

黑溝臺にて

夕されば早く戸ざして灯(ひとも)さぬ北支那の野に宿かりにけり

枕して今宵の宿りさびしめり蟲除藥ふり撒き
につつ

蠟燭をふき消して未だ寢ねなくに鼠の走る音
ぞきこゆる

燭消して土間をへだつる窓明り思ひがけなき
月夜なるかも

はるけくも我來し原の旅宿り外面さやかに月
いでぬらむ

戸をさして臭ひはこもる隣房に幼童らはや睡
るらし

かそかなるかなしみ湧けり夜もすがら飼葉食
むならむ馬の鈴音

竈(かまど)焚きて立居かひがひしこの家の嫁にかあら
む耳環垂れたる

あはれにも思ほゆるかも若妻は青き衣(きぬ)にし女
さびたり

庭隅の竈(かまど)はひくし釜の上に八角なせる蓋をせ
りけり

青韮の油に煮しを共にしてここの主人に親し
みものいふ

硝子戸の草花の繪も支那ぶりぬ壁に貼りたる
少女子の繪も

燐(ほ)寸(ち)すりて高粱(かをりやん)の酒は燃え立ちぬ火皿に青き
炎のゆらぎ

高粱酒の香り強きに驚けり卓の上しづかに杯を置く

酒飲めぬ吾が亡き兄もかくありけむ杯置きて我は思へり

夕餉とる卓にむかひてあひがたき今日の安けき旅をよろこぶ

滿洲行（三）

遼陽の城外の宿に着きしとき鳴神とどろと雨は到りぬ

俄か雨霽れし木立の上にして雲間に映ゆる白き塔

白塔に塒(ねぐら)するらむ喧(かまびす)しくうづまき群るる岩燕
かも

白塔の眞下(ました)の宿に着きにけり夕ぐれおそく群
鳥の聲

この國に夜はあけやすくめざめたりひとときや安寝(やすい)せしと思(も)ひしに

黒き煉瓦の建ものたてり巧(たくみ)なきありのままな
る露西亞ぶりかも

こまごまと買ひととのへし旅のもの枕べに置
き早寝せりけり

馬車にして顧みすれば青畝(あをうね)のこの原を壓して
白きあららぎ

いや遠く來りけらしも廣原に木がくり見えぬ
遼陽の塔は

赤彦兄諏訪明神神符を贈らる

尊(たふと)かる神のお守(まも)り札(ふだ)肌につけてつつましき吾
が旅ごころかも

入院中

よし町の家並つづく裏二階白(ま)畫(ひる)ひそかにすだ
れ垂れたる

となり家にもの言ひかはす男どち夕ぐれて飯
を炊ぐにやあらむ

となり家の物干臺の上にしてあらしのあとの
月照りにけり

ふる雨の小止みと思ふ小夜ふけにしまらく聞
ゆ席亭はねる音

嵐すぎし朝は霽れてすがすがし窓あけはなち
風を入れしむ

おのづから痛み忘れて目ざめたり日除斜に日
はかげりつつ

縁日に買ひ來しままの花ざくろしとどにぬれ
てあはれなるかも

とりどりに植木の鉢はおもしろし病み臥りつ
る枕べに置き

山川のたぎつさながらに鉢栽の家居も羨し釣する人も

はちうゑの青苔山のおきふしに流れは白く砂まきたる

いろいろの草の植ごみにかなしきは一輪しろき鷺草の花

湯河原温泉

ぬば玉のくらき雨夜に鳴きいづる蟲の遠音を吾は聽き居り

夕やみの草に鳴きづる蟲の音をあはれと思ひひとり寢にけり

蟲の鳴く夕となれば窓下のふきあげ水の音も
しづけき

ぬば玉の夜ふけに聞けば谷川の遠近に鳴る音
のしづけさ

自らのいのち寂しく守りつつ雨夜もふけぬ遠
蟲の聲

阿蘭陀繪

安永の頃秋田藩主佐竹曙山及小田野直武
等洋畫の作あり。

みちのくの出羽の大守と生れけむこの君にし
て描ける阿蘭陀繪

この君の゛がきける繪はおほらかなり蘭法に
ならひ吾が國ぶりの繪

丹念に゛がきける繪に落欵の曙山と大きくお
らんだ文字の印

いちはやくおらんだぶりを畫きしは吾が鄕人
よ小田野直武

明暗をとりて゛がけるふりにし繪珍笑ましも
よそのおらんだぶり

細密に゛がきたる繪は眞白なる兎に笹のかげ
をおとせる

壯くして逝きにし人の阿蘭陀繪は世に稀なれ
やくりかへし見つ

白田舍卽吟

畑中にこのいへつくり竹うゑてことし六とせ
の春たちにけり

年たちていやさびにけり植竹のかげさむざむ
し枯芝の上に

やぶ竹のしげれるを伐りすかせたり日かげま
ばらに土に照りつつ

庭土に立つ霜柱ほりかへし老樹の梅をうつし
うゑたり

いつしかに街とはなりぬ畑中のこの舍の向う
の丘も見えしに

懷舊（一）

屋根の雪日に日に解けて軒雫みだれながるる
春は來にけり

夕されば雪解の雫いつしかにつららと凝りて
軒に垂れたる

ふゆがこひ解きてこよひの月明り窓にさしい
る春となりにし

窓にうつる垂氷の影の一ならび今宵の月夜あ
きらけくこそ

まさやかにうつれる梅のかげ見つつ祖母にい
だかれし吾れをおもはむ

臥所の梅の影こそ移りたれ月のぼるらむかい
よよさやかに

月かげは臥所の窓にかたむきぬ寒さゆるみし
と思ふ夜ふけに

凝りのこる雪のへに照る夕月夜もののかげな
ど踏みてあそびし

懷舊（二）

雪はやく消えし門べの土かわき陽炎たつを見
れば樂しも

學びごとおろそかなるを叱られて屋根に遊び
しをひとり降り來し

凝る雪の底はうつろに雪解水土を洗ひてながれ出るかも

春いまだ寒き流にしづむ石あきらかにして鱗はねず

河原べの石を起せり水垢のつかぬ小砂利のきよらかにして

雪山をいでて流るる里川の近くに居れど瀬の音きこえず

み冬月雪に壓されし裏庭の芥けちらしあそぶくだかけ

雪ごもり春べとなれば我家の籬のくづれ結び直さむ

雜歌

ふるさとの山の起き伏し目にしめり夕やけ雲のあかき一と時　九月三十日歸省

懈りを悔いつついくるおろかさよ然か思ひつつ朝床にあり　自嘲一首

筑波峯に雪降りにけるやよひ月國生の丘に君を葬りし　長塚節十二周忌一首

ほのぼのと雨雲はるるみ山のうへ木々にましろく雪ふれり見ゆ　過大津一首

島木赤彦君を憶ふ

障子閉めてひそけく吾等ねたりけり一間に臥る君をおもひて

あら壁の隙間もる風寒みかも紙帳を垂れて君は臥せり

、ことなげにものをいひつれかくまでにおとろ
へましかしばし會はぬに
、眼さへすでに黄いろくなりにけり言葉詰まり
て對ふ悲しさ

皺ふかくおとろへしるきに驚けりけながきい
たみに堪へたりけむ

、癒えがてぬ病にはかにすすみつらむ皮膚の色
さへ變りはてつる

くさぐさのおもひめぐれるときの間も絶えぬ
疼痛をこらへたりけむ

このままに訣れとならむひとときに溜る涙を
雨と零らせり

いたいたしくおとろへましし君が眼に合ひし
吾はも心に泣かゆ

しみいづる涙をこらへ室の外に立ちいでぬれ
ど吾れ堪へなくに

香たきてつぶさに寫すみ佛の顔の色黄いろく
ひげのびにけり

つぶさに寂しき道をとほりたるいのち短きこの友を思へ

、しまひおきし友の寫眞をとり見つつ涙おとせり吾が妻も共に

癒えがたき病と君は知れるときも常たもちにしこころ張りけむ

雜歌

若葉せる庭におり立ちこの朝くまぐまあかるく掃きよせにけり

七十七の齡重ねし吾が母のすこやかにまして汽車着きにけり　迎母一首

大き蜘蛛人を恐れず目の前に疊這ひゐる山の宿りに　三峯安居會席上吟一首

たまたまに銀座に來つれ草市の人並なかを我もあゆめり

草市のにほひ身にしむ蓮の葉青き鬼灯瓜のとりどり

甍青く鵄尾の構は正しけれ唐招提寺の金堂を見し

雨霽れしみ寺の屋根に雀らの群ゐ噪ぐは樂しかるらし

おのが胃のしこりの上を觸りにつつさびしかりけむ君し偲ばゆ　赤彦追悼會席上吟一首

仙巌峠

大正十五年五月白田舍同人等と余が郷里にむかふ。

あしびきの山のふもとの驛路をはやく流るる二筋のみづ

門川のたぎつ春水すがしきに屈みて袂のナイフ落せり

高山に消のこる雪の下みづの落ちくるならむとほる冷たさ

みちのくの山のふもとの人家に宿乞ひもとむ風さむくして

宿につきて夕餉にむかふ樂しさよ夕餉の飯(いひ)に
しろく立つゆき

草鞋(わらぢ)穿(は)きて旅立つあした足かろし宿場(しゅくば)をすぎ
て橋わたりたり

朝早く宿を立ちいづるさわやかさ握飯(にぎりめし)二つを
つつみさげたり

旅慣れぬ友もいぶせきこの宿にひとよの眠り
たらひたるらし

山里に白くふふめる梨の花春いまだ寒しみち
のくにして

ひとときに芽ぶきたち匂ふみちのくのあかる
き春にあひにけるかも

山峡ゆ流れあふるる谷川のせまれるたぎち見
れどあかずも

荷を負ひて吾等の先をゆくをとこ一山をめぐ
り行きにけらしも

春おそき山路はろかに來しものか岨をうづみ
て消えのこれる雪

山越えてつき來し犬のかなしさよむすびの飯
を頒ち與へぬ

見さくればさやけくもあるか山脈に雪はのこ
れり國々の山

いにしへゆ國をさかひす嶺のうへ巖手秋田の
國を境す

のぼりつめて汗ふきにけり峯の上冷たき風は
吹きとほりつつ

雪の上に靄はたつらしみ山木の木立を罩めて
ふかき谿々

嶺の上をきりひらきたるみちのべに標木立て
り國を境す

尾根の雪ははやも消えつつなだらかに山腹め
ぐり下るみち見ゆ

ここにしておもひは清しいただきの笹原なび
け風わたるなり

寒竹　をはり

卷末記

明治三十二年の春に、僕は東京美術學校選科を卒業して羽後角館の鄉里に歸つた。その翌年五月大火に遇つて丸燒けになつた。父が幼いころのいたづらがきや、父が十八歳の春はるばると京都遊學の道中の寫生帖や、さては元治甲子の洛中の擾亂に、辻に切り捨てられた屍體の見取や、河原にあつた生々しい晒首の寫生や、各藩士の風俗などを描いた帖も、祖父の漫筆を綴つたものなど、悉く烏有に歸してしまつた。これまで學資はもとより、萬事について多大の恩惠を蒙つた瀨川大人に、なほこの上厄介になるのも心苦しい次第であるし、さればといつて畫會など催して掛物の繪を描く勇氣はなかつた。

三十四年、親友結城素明君の勸むるまま、その四月に再び上京して、同君の許に轉り込んだ、君はその頃一年志願兵として、近衛歩兵二聯隊に入營中であつた。留守番といつた格で食客となつたのである。僕がその頃君のお宅や、君の親戚の方々から受けた懇情は銘肝に堪へない。

これより先き、素明君の主唱によつて、繪畫界に於ける寫生主義の旗幟を鮮明にした光聲會が組織せられた。そして僕もその僅かな同人中に加へられたのであつた。この會は當時の畫壇に瀰漫してゐた理想派(觀念派朦朧派などとも稱せられた)に對して起つたのである。君は休日には兵營から歸り、軍服の上着を脱いだまま、光聲會の出品畫に筆を揮つたことを記憶する。一同大した意氣組であつた。

君は伊藤左千夫翁と親交があつた。ぽつねんとして交友を持たぬ僕は、君の紹介によつて、ある夜翁を本所茅場町の無一蘆庵に訪づれた。向嶋の

弘福寺前の結城君の家から、片道一時間餘を費した。生憎翁は留守であつたが、その後遠慮しながらも屢々お訪ねした。いつも歌の話や旅行の話を聽かされた。子規先生の翁に贈られた

竪川の茅場の庵に君つかば二十日の月い野を出でぬらむ

の情景を思ひ出す。左翁の家は、今の兩國線錦糸町のすぐ下の邊で、裏の水溜りには廣々とした蘆原が續いてゐた。水鶏(くひな)を聞きに來給へなどと、消息を貰つたのもそのころである。長塚節君、蕨眞君とも知り合になつた。

三十六年には、アララギの前身馬酔木が發刊された。素明君も編輯者の一員であつた。僕は下宿に移つた。翁からは、しばしば作歌を勸められたが、どうも口眞似で濟まされるものでなし、迚も手に負へぬものと控へてゐた。三十七年、故渡邊千春氏が社長で、電報新聞が創刊せられた、僕も畫報部員として入社した。新聞社關係の初めである。編輯局長は羽仁吉一君で、

寒川鼠骨君、河井醉茗君、窪田空穗君などと机を竝べてゐた。翌年日露戰爭の了らぬうちに社を辭して、その夏、國府犀東氏と富士登山をした。犀東氏も左翁と交遊の中であり、山上から萬葉調の卽興歌を、繪端書に書いて翁が許に寄せたりした。僕の歌心はこの機に始めて動いた。

甲斐が峯に北斗傾き東の天津國原夜明けむとす

巖根搖り岩屋岩戸も飛びぬべくうち吼え亘る富士の朝風

甚だ噴飯に堪へぬ次第であるが、初心者の僕はこんなものを懷にして、おづ〳〵と翁の許に教を乞うた。「天津國原夜明けむとす」も「富士の朝風」といふ語調も、みな耳底にある口眞似に過ぎない。恥しい次第であつた。近眼鏡を二つ重ねた翁は、破顏一笑して、次のやうに訂正して呉れた。

甲斐が峯に北斗傾き天の原かへりみすれば夜明けむとす

巖根ゆり岩屋岩戸も飛びぬべく蒼雲とよもす風のかしこさ

人麿の「かへりみすれば月傾きぬ」があつても、一向差支がないといつてくれた。この二首は馬醉木誌上に掲載せられて、えらく推賞されたが、「蒼雲とよもす風のかしこさ」は判然と腑に落ちなかつた。しばらく經つて九月頃、眞間の入江に寫生に行つた。その時の歌を、端書に記して送つた。翁より、一首捨つ五首とるべし、といつたやうな返信を頂いた。大した添削もなく、これも大に賞められた。いよいよ口眞似にも勇氣づけられた。それが第二回の作であつた。

四十年、田澤湖四十餘首を、茨城の長塚君に送つて見て頂いた。これは左翁を出し拔いた譯でない、長塚君と旅行の話の引つかかりがあつた故と思ふ。間もなく君から、この一聯一首も採れず、雜報歌なり、報告歌なり、悉く捨つべし、と細かにその病處を指摘された他に、當時の歌壇を論じた丈餘の手紙を寄せられた。少し調子に乘つて、天狗になりかけた鼻づらは、ひどく挫

かれてしまつた。歌といふものの見當がつかなくなつた。誰れの歌を見ても、みな長塚君のいふ、雜報歌報告歌としか思へなかつた。歌についての苦勞といふことを、全く知らなかつたからである。それでも左翁は、長塚君のいふほどでもないといつて、幾分手をいれてそのうちの、十數首をとつてくれた。

いつも紺絣の羽織を、紙縒(こより)の紐で無造作に結んだ學生君と、左翁の許で落合つた。この君は齋藤茂吉君であつた。君の伯夷叔齊の歌や、赤彦君(當時柿の村人)の諏訪の歌は、大に敬服したもので、竊かにあこがれた歌を作りたいと、苦心したこともある。古泉千樫、石原純、篠原志都兒、中村憲吉の諸君とも、前後して知り合になつた。三十九年信州へ旅行の途次、上諏訪で赤彦君と初めて會つた。

四十年の冬、第一次西園寺内閣の議會から、國民新聞社へ入社して、そのス

ケッチを擔任することになつた。四十三、四年は一首もない。日々忙はしい社の勤めや、書籍雜誌の裝幀などに、自然興味を持つて來たし、またそれによつて、生活費を得たのであつた。然し、左翁や他の諸氏との親交も持續してゐたし長塚君とも益々深く交はるやうになつた。

穩田に移つて庭さきに、寫生する爲に、鴨と七面鳥を飼つてゐた。ある日齋藤君が訪れて作歌に耽つた。その時の歌がかの「赤光」の七面鳥である。僕もしばらく懶けてゐた作歌を試みた。これは齋藤君から、長塚君に送つて削正を乞うた。そのうちの一首(鴨八首のうち)

飯杓子なす嘴もおもしろふた股に鏤めたれば眼さへおもしろ

殆んど改作に近い、原作は忘れたがもとより成つてゐない。長塚君は嚴選するつもりであつたらうが、齋藤君が何でも八首にせよといふので、困つたとこぼしてゐられた。アララギは一段八首組であつたのである。

これまで歌は、思ひ出しては作つてゐたやうな、不熱心さであつたが、再び芽を吹き出して來た。大正二年には、左翁逝き、同四年には、長塚君もとうとう歿した。その後は專ら、齋藤茂吉君に指導を乞うた。古泉君も穗田に引越されてから、偶には目を通して貰つた。

大正五六年頃から、新聞社の方も稍々自由な身になつた。版畫やスケッチに沒頭して、しばらく捨ててゐた畫筆にも親しむ氣分に向いて來た。作歌慾も擡頭した。歌についての苦勞も知つて來た。齋藤君が長崎醫專の教授として赴任せられてからは、赤彥君に引きついで見て頂いた。八年二月帝大病院で、佐藤三吉博士の手術を受けた。ひどい盲腸炎であつた。麻醉から目が覺めて、現のうちに朦朧と浮ぶことは歌のことであつた。枕邊に赤彥君の、無言に目を睜つてゐられた顏が目に浮ぶ。偶然とはいへ齋藤君も、入院の前上京してゐられたし、來る筈がない中村憲吉君も、備後からは

るばる病床へ見舞はれた。自分はひそかにおしまいではないか知らとも思はれた。十年の十月齋藤茂吉君の外遊を、同人と共に横濱埠頭に惜別して、翌日田所博士に鼻の手術をうけた。もう退院しようとしたころ、ふとした出血の癖から、絕對安靜を守つた。二三日間自分は屍體になつたつもりで、微動だもせぬやうにしてゐた。赤彥君が紙片に「絕對安靜」の四文字を示して、二三分と經たずに無言のまま歸つた。僕も口もきかず動きもせずにゐた。一ヶ月程して退院するまでに至つた。藤澤古實君が附き添つて、始めて外出した。十月末の澄みきつた空に、湯島天神境內の大銀杏は、眞黃色に輝いてゐた。崖下の瓦屋根も電線も、ぐらぐらと搖らいで見える。

ものみなはとよみの中にあきらけし黃金いろゆるる銀杏の立樹(原作黃金色震る)

この暮れには、何となしに氣が焦燥してたまらなかつた。常に通學して

ゐた門生らも、ちつとも顏を見せぬ。事毎に僕を興奮させた。僕はただ歌にのみよつて、心神の平衡を保つた。白田舍歳晩の數首はそれである。赤彦君は、これまでより歌柄がずつと進んで來たといはれた。

眞劍に歌の苦勞といふことを知つて、遂、繪の事を忘れて、茫然と考へ込むことも少くなかつた。その後、歌の爲には晝の時間を割かぬやうにした。

十二年の大震火災には、多くの知友もその災に罹つた。山の手の郡部に住つた僕の家は幸ひに無事であつたが、高田浪吉君は、母堂や妹君を亡はれたし、岡さんは、麴町で火災に遇はれた。赤彦君は非常な困難して、混亂の中に見舞つて呉れたことを思ひ出す。その月諏訪でアララギ震災號を出してくれた。かかる大事の際に、摧けかかつた一同の氣分を引き締めた。君が常に唱道せられた鍛練道の發露である。十五年三月には、前年から不治の病を獲て病床に呻吟しつつ、下諏訪の柿蔭山房に永久の眠についた。

顧みると、僕の作歌年代は隨分と古い。然し其の割に數が甚だ少ない。明治三十九年、富嶽の歌を試みて以來、この春一月までの總數僅かに七百數十首に過ぎない。その中大正十一年までのものより、赤彦君が百五十首選して、中央公論大正十一年三月號に發表した。アシビやアララギに發表したものに、自分も幾分手をいれて、更に赤彦君の訂正を乞うたのもある。これ等のものも更に淨書して、齋藤茂吉君の嚴選を願つた。このほか岡麓、中村憲吉、土屋文明の諸君からも助言を忝うした。この集六百二十五首は、みな悉く先輩師友の息のかかつたものであるから、安神して僕の不敏な歌集を公刊するに至つたのである。

また一面には自分の本業のことも顧みねばならぬ。自分の繪はすべてに於て未成品である。花鳥畫も、山水畫も、人物畫も、何物にも達してゐない。自分の繪は芥箱に等しいのかも知れぬ。よくいつても田舍の雜貨店のや

うなものかも知れぬ。砂糖もあれば釘もある、草履や洋傘もあれば、一寸した萬年筆もある、といつたやうなものであつて、自分から藝術品と名乗るほどのものはない。然しただ造花はない、研をかけた貝細工やまがひものの寶石は持合せない。歌も到底本筋のものでないことはいふまでもないけれども、それだといつて双方共、このままではいけない。

僕も今年は五十の定命を越えた。然し六十七十の齢も僕には何とも思はれない。生命のあらむ限りは向上しなくてはならないと思ふ。春以來いろ〳〵な雜事に追はれ、遂懶けながらもしみじみとこのことを考へた。

森山汀川、山口茂吉、辻村直の諸君からは筆寫に、校正に、多大の配慮を得て忝い。また古今書院橋本君には、快く出版を引受けられたことを深く感謝する。

昭和二年十月十七日白田舍にて　著者識

歌集寒竹奥附
定價貳圓貳拾錢

昭和二年十一月十三日印刷
昭和二年十一月十五日發行

著者　平福百穂
東京市外西大久保四五九

版權所有

發行者　橋本福松
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

印刷者　菊地眞次郎

秀英舍印行

發兌元　東京市外西大久保四百五十九番地　古今書院
振替東京三五三四〇番

アララギ叢書目次

第一編　島木赤彦・中村憲吉著　馬鈴薯の花　古今書院発行　定價一圓八十錢

第二編　齋藤茂吉著　赤光（しゃくくわう）　東雲堂発行　定價二圓三十錢

第三編　古泉千樫著　屋上の土　未刊

第四編　島木赤彦著　切火（きりび）　品切

第五編　齋藤茂吉著　短歌私鈔　品切

第五編　齋藤茂吉著　續短歌私鈔　品切

第六編　中村憲吉著　林泉集　春陽堂発行　定價一圓八十錢

第七編　齋藤茂吉著　童馬漫語　春陽堂発行　定價二圓五十錢

第八編　島木赤彦著　氷魚　岩波書店発行　定價二圓五十錢

第九編　長塚節著　長塚節歌集　品切

第十編　齋藤茂吉著　あらたま　春陽堂発行　定價二圓四十錢

第十一編　伊藤左千夫著　左千夫全集　品切

第十二編　松倉米吉著　松倉米吉歌集　古今書院発行　定價一圓五十錢

第十三編　土田耕平著　青杉　古今書院発行　定價一圓八十錢

第十四編　石原純著　靉日　品切

第十五編　中村憲吉著　しがらみ　岩波書店発行　定價一圓八十錢

第十六編　島木赤彦著　歌道小見　岩波書店発行　定價一圓五十錢

第十七編　アララギ所編　大正十二年震災歌集　灰燼集　古今書院発行　定價一圓八十錢

第十八編　島木赤彦著　太虚集　古今書院発行　定價二圓二十錢

第十九編　村上成之著　翠微　古今書院発行　定價一圓五十錢

第二十編　土屋文明著　ふゆくさ　古今書院発行　定價二圓三十錢

第二十一編　島木赤彦著　萬葉集の鑑賞及び其批評　岩波書店発行　定價二圓

第二十二編　岡麓著　庭苔　古今書院発行　定價二圓五十錢

第二十三編　島木赤彦編　アララギ大正十三年度年刊歌集　岩波書店発行　定價一圓五十錢

第二十四編　アララギ所編　故人歌集　1　近刊

第二十五編　齋藤茂吉著　つゆじも　近刊

第二十六編　齋藤茂吉著　金槐集私鈔　春陽堂發行　定價二圓八十錢

第二十七編　齋藤茂吉著　良寛和歌集私鈔　近刊

第二十八編　齋藤茂吉著　童牛漫語　近刊

第二十九編　アララギ編　發行所　故人歌集 2　近刊

第三十編　平福百穗著　寒竹　古今書院發行　定價二圓貳十錢

第三十一編　藤澤古實著　國原　岩波書店發行　定價二圓六十錢

第三十二編　島木赤彥著　柿蔭集　岩波書店發行　定價二圓

第三十三編　アララギ編　發行所　大正十四年度　年刊歌集　近刊

第三十四編　アララギ編　發行所　故人歌集 3　近刊

第三十五編　岡麓著　歌話書話　代々木雜筆　近刊

357
139

終